

資料

「教育相談」における講義改善に向けた検討 ——教職課程履修学生に対する授業評価内容と満足度調査を通して——

石山貴章

高知県立大学地域教育研究センター

要約：本研究では、「教育相談」講義に関する学生の学びを通して、講義内容や方法の修正・改善に向けた検討を行った。研究協力者は教職課程を履修している大学生 65 名で、講義の最終回で実施したレポート課題と授業満足度に関する質問紙調査を分析対象とし、ここで得られたデータを、それぞれ、KJ 法、KH Coder、CS を援用しての学びにおける授業評価と満足度指数を求めた。その結果、学生たちの学びの意義とする項目として、「専門性」「相談スキル」「カウンセリングマインド」「信頼関係」「予防的支援」「連携支援」「チームアプローチ」等の項目が浮上し、また、CS における満足度調査からは、満足度が高い項目として、「講義方法」「講義内容」「講義資料」「専門性」などが抽出され、一方、教授課題としては、「主体的な学び」「演習・ワーク」「振り返り」の 3 項目が確認された。

(キーワード：教育相談，満足度調査，KJ 法，計量テキスト分析，講義分析)

Consideration for Improving Lectures in "Educational Counseling" —— Through an Analysis of Class Evaluations and Satisfaction Surveys for Students in Teacher Training Course ——

Takaaki ISHIYAMA

The Community Center for the Advancement of Education and Research, University of Kochi

Abstract: This paper examines the revision and improvement of lecture content and methods through the study of "Educational Counseling" taught at a university. The research participants were 65 university students in teacher-training course. Report assignments completed in the final lecture and questionnaire surveys regarding class satisfaction were analyzed. The data obtained were then analyzed using the KJ method, KH Coder, and CS analysis to calculate a learning satisfaction index. The results indicated that the students' learning was meaningful, including "expertise", "counseling skills", "counseling mindset", "trust", "preventive support", "collaborative support", and "team approach". Furthermore, the customer satisfaction analysis revealed that "lecture method", "lecture content", "lecture materials", and "expertise" were highly valued. Meanwhile, the three teaching challenges identified were "proactive learning", "exercises/work", and "reflection".

(Keywords: educational counseling, customer satisfaction, KJ Method, quantitative text analysis, lecture analysis)

1. 問題と目的

教育相談に対しては、児童生徒の視点からの相談支援、教師の意識や能力向上の必要性、ICT やインターネットの普及などにより、学校教育現場に求められる相談支援アプローチも複雑、多岐にわたるようになってきていることが指摘されている¹⁾。また、児童生徒の多様性を理解した上での支援も不可欠となっており、個々の実態や課題に

即応したサポートのあり方が追究されなくてはならない。

従来からの学校教育現場の課題である、いじめ、不登校、児童虐待、問題行動、保護者対応、貧困などの問題に加えて、LGBTQ⁺、ヤングケアラー、発達障がい、外国人児童生徒等における多様性への対応等、複雑化、多様化する課題に対しての対応スキル獲得が求められる状況になっている。

文部科学省 (2015) は、教育相談等に関する調査研究協力者会議 (平成 27 年 12 月 4 日) における「児童生徒の教育相談の充実について (通知)」で、教育相談体制の充実による問題行動などへの未然防止や早期発見及び支援・対応等への体制構築、学校内の関係者がチームとして関係機関と連携した体制づくり、SC (School Counselor: スクールカウンセラー) 及び SSW (School Social Worker: スクールソーシャルワーカー) の職務内容の明確化、学校及び教育委員会における組織的支援体制の構築について報告を行っている¹⁾。

また、「児童生徒の心のケアや環境の改善に向けたスクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーによる支援の促進等について」(文部科学省初等中等教育局児童生徒課, 2020)²⁾及び「スクールソーシャルワーカーの効果的・効率的な活用促進について」(文部科学省初等中等教育局児童生徒課, 2024)³⁾でも、SC 及び SSW による積極的、効果的な支援について、各学校や教育委員会などとの連携を強化した支援体制の構築が示されている³⁾。向後・山本 (2019) は、相談のきっかけとなるサインに気づき、受容・傾聴・共感といったカウンセリングマインドの必要性や教師自身が自分の立ち位置や経験知などの枠組みから相談支援を実践していることに言及している⁴⁾。これは、他者の相談内容を自分自身の考えを通して解釈してしまうことにより、相談内容の本質から大きく離れてしまう可能性を指摘しているものであると考える。葉山・松久・永井・八木・玖村 (2025) は、大学における教育相談実践基礎プログラムに関する科目間連携について、准学校心理士資格科目である「教育相談」「発達心理学」「教育心理学」「特別支援教育」の 4 科目と「インターンシップ」の計 5 科目において、学生の学びや授業評価などのデータを根拠として、各科目の位置づけや内容の関連性、独自性を整理し、より効果的、実践的な大学講義のあり方を指摘している⁵⁾。この指摘は、非常に重要であり、各関連科目間の同質性と異質性の差別化を図りながら、横の関連性を踏まえた講義のあり方が検討されなくてはならないだろう。丹羽・吉澤 (2024) は、教育相談体制の改善と教師支援力の強化による教育相談活動の機能

向上に関して、質問紙調査及び面接調査を実施し、教育相談支援体制に係るガイドラインを作成し、教師の子ども相談支援力の強化とチームアプローチにおける支援力の双方の効果について検討を行っている⁶⁾。ここでは、教育相談体制の見直しや整備、教師の相談活動の機能向上の重要性が実証されており、教師や学校の相談支援力を高めていくための取り組みが提示されている。石山 (2024) は教職を目指している大学生の「いじめ」に関する学びの意識について、質問紙調査の自由記述文と講義で実施している Minute Paper に着目し、Hayashi's Quantification Methods Type III と計量テキスト分析 (KH Coder) による検討を通して大学講義やグループワークなどへのフィードバックにつなげている⁷⁾。

柁 (2021) は大学生を対象とした回想法調査から中学校の教育相談において教師に求められるコンピテンシーの検討を行っている。ここでは授業内外におけるコミュニケーションやはたらきかけ、言動や態度といった日常の関わりや接し方における関係性としての「相談のしやすさ」「受容的態度」「生徒目線」「対等な関係性」「安心感」「人間性」が相談支援に影響を与えていることが示されている⁸⁾。生徒との向き合い方や関わり、対応姿勢、安心感を含めた雰囲気などが相談のしやすさや信頼性につながることが指摘されていると考えられる。

亀田 (2024) は教員養成課程におけるセルフコンパッション (自分自身への思いやり) を高めるプログラムの効果と教育相談に与える影響について検討を行っており、その結果、大学生によるワークの前後においてセルフコンパッションおよび自尊感情の変容を確認した上で、このセルフコンパッションが高まることによって児童生徒への教育相談に対する意識の高まりを確認している⁹⁾。教育相談支援におけるセルフコンパッションは、とりわけカウンセリングマインドとしての「傾聴」「受容」「共感」には重要な視点であることが問題提起されていると考えられよう。

これらの先行研究から、教育相談における学校や教師の支援力向上は不可欠であると考えられるが、そのためにも、カウンセリングマインドの基

本的なアプローチや具体的な関わり方などに関して、大学における講義内容や教授方法などのフィードバックを通じた授業改善や講義の質保証のための手立てや要因について、さらなる問題が追究されなくてはならないと考えた。

本稿で取り上げた「教育相談」の講義では、学校現場で実践されている相談援助技術を具体的に提示し、様々な教育相談ケースを取り上げ、どのようなアプローチが有効的・効果的なのかを検討しながら、学校教育現場で必要とされている教育相談の基本的理解を深めていくことや教育相談スキルの獲得、教育活動に積極的に相談支援を活かしていく姿勢を身につけることを目的としている。

ここでは実際の講義分析を通して、先行研究では十分に提示されていなかった問題を探索的に再検討し、講義の質改善に向けた新たな課題を見出していくことに意義があると考えている。

よって、本研究では、授業満足度に関する質問紙調査とレポート課題について、消費者行動分析などで活用されている CS (Customer Satisfaction) を援用した講義満足度の算出及び計量テキスト分析 (KH Coder) によって教育相談に関する講義を多角的、批判的に省察し、今後の教育相談の講義内容や教授方法、課題提示、問題提起のあり方などについての基礎的資料を提示していくことを目的とした。

2. 方法

2.1 対象

「教育相談及びキャリア教育の理論と方法」を受講している大学 2, 3 年生, 計 65 名 (文化学部 38 名, 看護学部 19 名, 健康栄養学部 8 名) を対象として、最終回の講義で実施したレポート課題の内容分析及び「教育相談」に関する講義における満足度を把握していくための質問紙調査で得られたデータを分析対象とした。なお、最終回の講義レポートのテーマは「全 15 回の講義で特に問題意識をもった課題 1 つを選択し、“気づき” “学び” “自分の考えや主張” を記述し、教育相談の講義で得られた学びを、教師になった時にどのように活かしていきたいか」というテーマで実施している。

2.2 分析方法

本研究では、質問紙調査及び最終レポート課題の内容を具体的に把握していくために、テキストマイニングを用いて分析を試みた。

2.2.1 KJ 法 (川喜田, 1967)

KJ 法とは、蓄積された情報から重要とされるキーワードや概念などを取り出し、関連するものを紡ぎ合わせて整理し、データを統合していく手法のひとつである¹⁰⁾。カードを活用するところに大きな特徴があり、内容や質がさまざまなものを整理・統合し、全体の意味内容や重要とされる概念・カテゴリーなどを把握していくことができる。今回の調査では、レポート課題に記述された内容を基にして、重要概念を生成していった。

2.2.2 計量テキスト分析 (樋口, 2020)

KH Coder は、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理分析し内容分析 (content analysis) を行うテキストマイニング手法である¹¹⁻¹²⁾。ここでは、計量テキスト分析を内容分析 (content analysis) の一種または一部として位置づけられており、分析方法が信頼性・妥当性を備えねばならないことや、単なるデータの記述ではなく推論を含むと言った、内容分析の考え方を受け継ぐことや「計量的分析方法を用いてテキスト型データを整理または分析」という言葉によって、量的方法を用いることを明示している。ここで言う量的方法とは、必然的に質的方法を含むものであり、量的方法と質的方法を循環的に用いた結果として、量的分析の結果はデータの「整理」にとどまり、質的な分析・記述が主に報告される場合もある。本研究では、KJ 法と併用したかたちで、より客観的にレポート課題で記述されたデータを把握し、結果を視覚化していくために計量テキスト分析を実施した。

2.2.3 講義満足度

教育相談に関する講義の問題意識を客観的に把握していくために、主にマーケティング分野などにおける顧客満足度調査で活用されている CS を援用して講義満足度に関するデータの分析を試み

た¹³⁾。なお本稿では顧客満足度を学生の講義満足度として分析を行っている。

2.2.4 倫理的配慮

本調査の意義と目的について具体的な説明を行い、調査協力の同意を得ている。また、調査で使用した質問紙調査は無記名となっており、分析終了後には、すべてのデータを消去している。なお、本報告に関しては、本学で導入している剽窃チェックプログラム (iThenticate2.0) を実施している。

3. 結果

3.1 最終レポート課題テーマ選択結果

全 15 回のシラバス (表 1) と講義最終レポート課題のテーマ選択の結果 (図 1) を示した。学生が選択したテーマで一番多かったのは「不登校」であり、次いで、「いじめ」「児童虐待」「保護者支援」「LGBTQ+」「ロールレタリング (RRLW)」「構成的グループエンカウンター (SGE)」「キャリア

教育と進路支援」「アサーション (Assertion)」「ブレインストーミング (BS)」「アンガーマネジメント」「カウンセリングマインド」となっている。やはり、学校現場での課題となっている「不登校」「いじめ」「児童虐待」「保護者支援」に関する関心が高く、教育相談技術がそれに次いでいる。

3.2 KJ 法分析結果

最終レポート課題の内容について有意味語を抽出し、研究者 3 名 (うち、大学院生 1 名含む) によって分類作業を行った。分析手続きとしては、レポートを読みながら有意味語をマーカーし、抽出された語を付箋紙に転記し、その後、分類分けを行いながら、より客観的にレポート課題で記述されたデータを把握し結果を明確化していった。

本講義では、教師に必要なとされている「児童生徒理解」「アセスメント」「相談援助技術」「カウンセリングマインド」「キャリア支援」などの理論に依拠しながら学校現場での教育相談ケースを

表 1 講義シラバス

回数	講義テーマ
第 1 回	オリエンテーション～教育相談とは～
第 2 回	教育相談の基本的理解～カウンセリングマインド～
第 3 回	アンガーマネジメント
第 4 回	構成的グループエンカウンター (SGE)
第 5 回	児童虐待に関する相談支援 (1)
第 6 回	児童虐待に関する相談支援 (2)
第 7 回	いじめに関する相談支援
第 8 回	不登校に関する相談支援
第 9 回	保護者に関する相談支援
第 10 回	LGBTQ+ (性的マイノリティ) に関する相談支援 (1)
第 11 回	LGBTQ+ (性的マイノリティ) に関する相談支援 (2) DVD 視聴
第 12 回	相談支援の技術① ブレインストーミング (BS)
第 13 回	相談支援の技術② アサーション (Assertion)
第 14 回	相談支援の技術③ ロールレタリング：役割交換書簡法 (RRLW)
第 15 回	キャリア教育と進路支援 まとめ
最終レポート試験	記述試験

想定しつつ、どのようなアプローチが有効的・効果的なのかを検討しながら教育相談を実践的に学ぶことを目的としており以下の 3 つの達成目標を設定している。

- 1) 学校教育現場で必要とされている教育相談の基本的理解を深める。
 - 2) 教育相談に関する基本的理論を踏まえながら教育相談の実際を理解していく。
 - 3) 教育相談に関心をもち教育活動に活かしていく姿勢を身につける。
- また評価方法としては以下の 3 つを設定している。
- 1) 毎回の Minute Paper を総合的に評価する (目標 1, 2, 3) 30%
 - 2) 授業中の活動 (ペアワーク, グループワーク) (目標 1, 2, 3) 20%
 - 3) 最終レポート試験課題 (目標 1, 2, 3) 50%
- 講義では、演習やワーク、映像なども取り上げながら学生の問題意識を高めていくための手立てを講じている。また予防・開発的相談アプローチについても学生たちに実際に体験をさせつつ修得を図っている。

3.3 最終レポート課題テーマ選択

最終レポート課題テーマ選択 (図 1) では、最も多く選択されたテーマとして「不登校」が 15 人 (23.1%), 次いで「いじめ」が 12 人 (18.5%), 「児童虐待」が 10 人 (15.4%), 「保護者支援」が

7 人 (10.8%), 「LGBTQ+」5 人 (7.7%) などとなり講義内容や方法・映像などの要因もあるが 65 名の学生の関心テーマとしては上記内容の選択が高かった。なおテーマ選択の分布には学生人数とテーマ数の関連で偏りがみられている。

3.4 KJ 法分析結果

KJ 法の分析結果 (表 2) では、最終レポート課題のテーマ選択で出てきた内容が多く記述されていた。また「教育相談」の 15 回の講義で提示してきた支援キーワードとして「カウンセリングマインド」「信頼関係構築」「連携支援」「チームアプローチ」「専門性・相談スキル」「指導・支援の手がかり」「多様性の尊重」などに関する記述も多くなされていた。ここで出てきている支援キーワードは、教育相談場面では重要な手立てであることが認識されていると考えられる。

3.5 計量テキスト分析 (KH Coder, Ver. 2. Beta. 30e) (レポート内容分析, 結果の視覚化) 結果

講義の最後に課したレポートに記述された言語データを KH Coder を援用してテキストマイニングを行いデータ結果の可視化を行った。今回は紙面の都合上、自己組織化マップ (語と語の関連を探索, クラスタ化) と多次元尺度構成法 (出現頻度をもとに語と語の関係性を把握し純粋な出現頻度をもとに語と語同士の関係を把握できる手法) の 2 つを提示している。

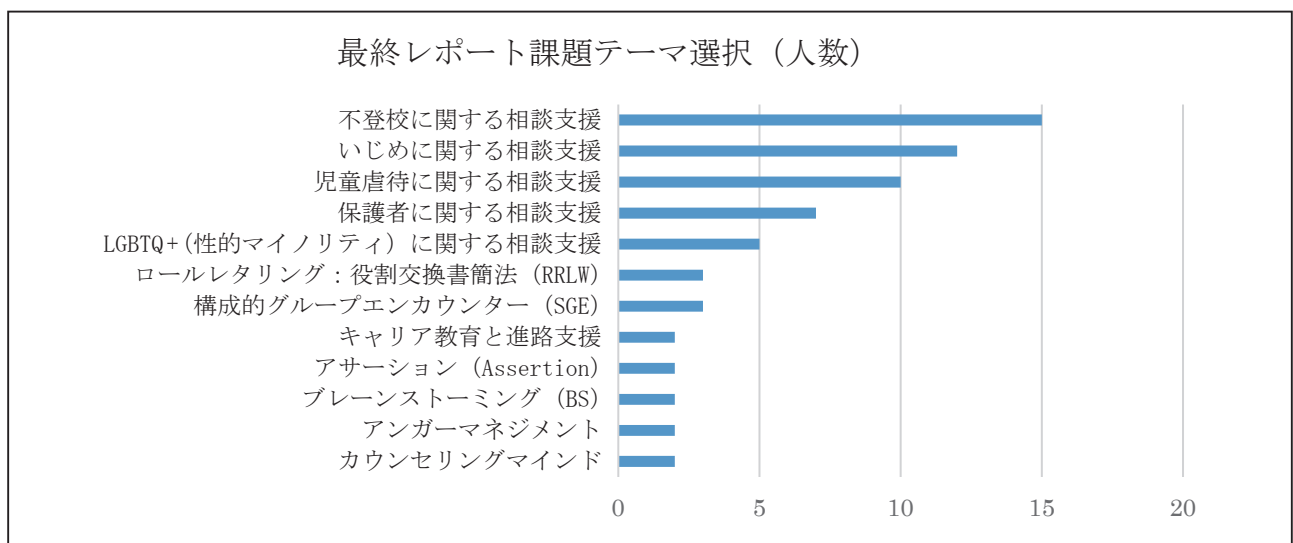


図 1 最終レポート課題テーマ選択結果

表 2 KJ 法分析結果 カテゴリー化 (分類の収束化プロセス) No は回答者

カテゴリー	分類	回答例 (一部抜粋 / 略)
カウンセリング マインド	傾聴・共感	No.6 まずは、しっかりと生徒の話を受容し、共感しながら聴いていくことが重要になってくる
	受け止める	No.10 相談内容を記録しながら、ことばの重みを受け止めていく姿勢が求められる
	共に考えていく	No.12 問題を早急に解決しようとはせずに、一緒に考えていく姿勢をもって関わっていく
いじめ	予防的アプローチ	No.9 いじめを生じさせないように、日々の学校生活のなかで継続的に、教師と生徒、そして、生徒同士で議論を重ねていくことが必要ではないだろうか
	事実確認	No.21 いじめ相談は、事実確認と具体的な事案について聞き取っていくことからスタートしなくてはならない
信頼関係の構築	積極的関与	No.5 日頃から、生徒と積極的、主体的に関わっていくことを通して、実態を把握していくことが必要である
	コミュニケーション	No.28 気にかかる生徒がいた場合は、必要に応じて声かけをおこなっていく
連携支援	SC/SSW	No.20 相談内容によって、SC や SSW にアドバイスを求めていく
	行政 / 福祉 / 医療	No.19 生徒の状況によっては、行政や福祉、医療機関などとの連携も必要となってくる
チーム アプローチ	情報共有 / 情報交換	No.32 他の先生や管理職なども交えた情報共有や情報交換が大切となってくる
	一人で背負わない	No.60 担任などが決して一人で背負わないこと
	協働作業	No.47 ひとりの生徒をチームで支えていくといった認識が求められる
専門性 相談スキル	専門性	No.22 教師として相談支援における基本的な知識や専門性を高めていく必要がある
	研修への参加	No.42 積極的に相談支援などに関わる研修会などに参加し、専門性やスキルを高めていかななくてはならない
発達障がい	実態把握	No.5 まずは、子どもの実態や課題を的確に把握していくことが求められる。場合によっては質問紙調査や客観的な指標 (心理検査) なども用いていく必要がある
	基本的理解	No.10 発達障がいの特性や支援方法などを理解しておくことが求められる
児童虐待	気づき	No.17 教師は、児童虐待を見つけやすい立場にあることを意識して、日頃から生徒の様子を確認しておかなくてはならないだろう
	即時対応	No.35 命に関わるような緊急性が確認されるケースでは管理職を通じて、素早く児童相談所などと連携を図らなくてはならない

保護者	情報共有	No.59 生徒と確認をした上で保護者にも協力を求めていくことも大事になってくるのではないか
	保護者への伝達	No.38 保護者に対しては不安をあおらないかたちで情報を伝えていくことが大切となってくる
指導 / 支援の手がかり	授業へのリンク	No.9 日頃の授業でも生徒一人ひとりの様子を確認していかなくてはならない
	生徒指導	No.33 教育相談と生徒指導, 授業実践は連動していることを意識しておくこと
	学力問題	No.65 大幅な学力の落ち込みなども常に確認していくことが重要である
不登校支援	学びの場の保障	No.30 まずは生徒の学びを切らさないような支援やアドバイスなどが求められる
	別室登校 / 保健室登校	No.44 集団に入ることが難しい場合は, 他の教育環境を設定していくことが必要である
問題行動	背景要因	No.15 行動にとらわれることなく, 行動の背景要因を推し図っていくことがまずは求められるだろう
	承認欲求	No.62 問題行動については生徒の承認欲求があることを教師自身が意識しておくこと
多様性の尊重	多様性	No.15 学校教育で定期的に多様性に関する問題に関わる問題を取り上げて生徒と共に考えていく時間が必要
	周囲に対する理解の促進	No.22 根強い偏見や差別などに対して積極的に生徒に対し問題提起をしていく活動なども求められると考える。映像や資料なども適切に用いていく

なお, KH Coder で得られた頻出語リスト (図 2) では「支援」「学校」「登校」「生徒」「教育」「児童」「相談」「保護者」「連携」「社会」「学び」「体制」「環境」「活用」「関係」「多様」「カウンセリング」「チーム」「研修」「効果」「機関」「専門性」「アセスメント」などに関係する語が抽出されており, 組織的な支援体制づくりや相談支援のスキルの獲得, 専門性の向上, 相談環境を整えていくこと, 保護者と各関係機関との連携を図っていくことなどが重視されていることが分かった。

自己組織化マップ (図 3) は jaccard 係数 (ある語とある語の共起性を示す係数で 0 から 1 までの値をとり関連が強いほど 1 に近づく) と自己組織化マップ (n 次元データの類似度を 2 次元上の距離で表し類似度の高い形態素同士が近くに附置される) を組合せて分析していくものである。特徴としては結果に関わる因子を調べるために得ら

れたデータをクラスター化できるところにある。特にテキストマイニングでは文や段落ごとに得られたデータのクラスタリングを行い, 結果に現れた言語と言語の関係性を把握し, それを二次元平面に視覚化できるところにある。従って, 結果の配置を見れば, 学生が獲得した学びの概念が把握しやすくなり結果を推測することが可能となる。

例えば右上のクラスターでは「チーム」「体制」「アプローチ」「家庭訪問」「保護者不安」などが配置されており, 中下のクラスターでは「フリースクール」「整備」「自己肯定」「学びの多様化学校」が配置されている。いずれも不登校支援が重視されていることが確認できる。

多次元尺度構成法の分析結果 (図 4) は全体を俯瞰して結果を解釈していくためのものとなる。多次元尺度構成法は語が近いか遠いかに意味があり語と語の類似度を解析するために用いられる。

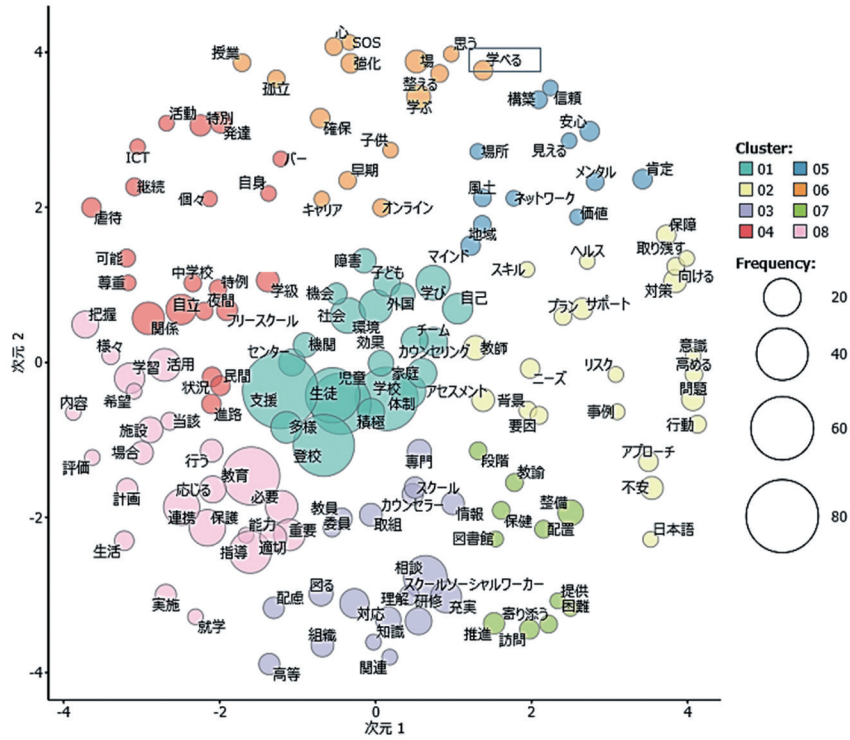


図 4 多次元尺度構成法結果

3.6 講義満足度の結果

今回の調査では、筆者が評価 9 項目 + 総合評価 (表 3) を用いて分析を行った¹⁴⁾。各項目の評価については CS で活用される評価のまとめ方を援用し 5 段階評価を「大変満足」「満足」のいずれかで回答したものを「満足」とし「やや満足」を

「普通」、「不満足」「大変不満足」を「不満足」と 3 段階評価としたうえで、各質問項目ごとに回答数及び割合を算出しグラフ化した。次いで各評価項目と総合評価との単相関係数を算出し、9 項目の評価をプロットしたものが図 5 である。ここでは単相関係数を“重要度”とし、「満足」の割合

表 3 「教育相談」講義満足度調査票

問 1 「教育相談」講義におけるあなたの評価に○をいれてください

1. 大変不満足 2. 不満足 3. 普通 4. 満足 5. 大変満足

A	講義内容はどうでしたか	1	2	3	4	5
B	講義資料はどうでしたか	1	2	3	4	5
C	講義方法はどうでしたか	1	2	3	4	5
D	専門性を修得することはできましたか	1	2	3	4	5
E	技術・スキルを修得することはできましたか	1	2	3	4	5
F	主体的な学びはどうでしたか	1	2	3	4	5
G	映像データの効果はどうでしたか	1	2	3	4	5
H	演習・ワークの効果はどうでしたか	1	2	3	4	5
I	振り返りの効果はどうでしたか	1	2	3	4	5

問 2 「教育相談」講義を総合的にとらえて評価に○をいれてください

1. 大変不満足 2. 不満足 3. 普通 4. 満足 5. 大変満足

表 4 「教育相談」講義満足度調査結果

	満足率	相関係数	満足率 偏差値	相関係数 偏差値	角度	修正指数	距離	改善度
講義内容	73.8	0.7137	58.75	68.00	70.92	0.212	20.01	4.24
講義資料	73.8	0.5838	58.75	59.39	87.98	0.022	12.83	0.29
講義方法	87.7	0.2540	66.06	37.52	172.85	-0.921	20.33	-18.72
専門性	72.3	0.4383	57.94	49.74	136.85	-0.521	7.94	-4.13
技術・スキル	52.3	0.4372	47.38	49.67	52.13	0.421	2.64	1.11
主体的な学び	36.9	0.1927	39.27	33.46	102.01	-0.133	19.72	-2.63
映像データ	49.2	0.4468	45.76	50.31	40.84	0.546	4.25	2.32
演習・ワーク	33.8	0.3763	37.64	45.63	64.47	0.284	13.11	3.72
振り返り	35.4	0.5367	38.45	56.27	16.49	0.817	13.14	10.73

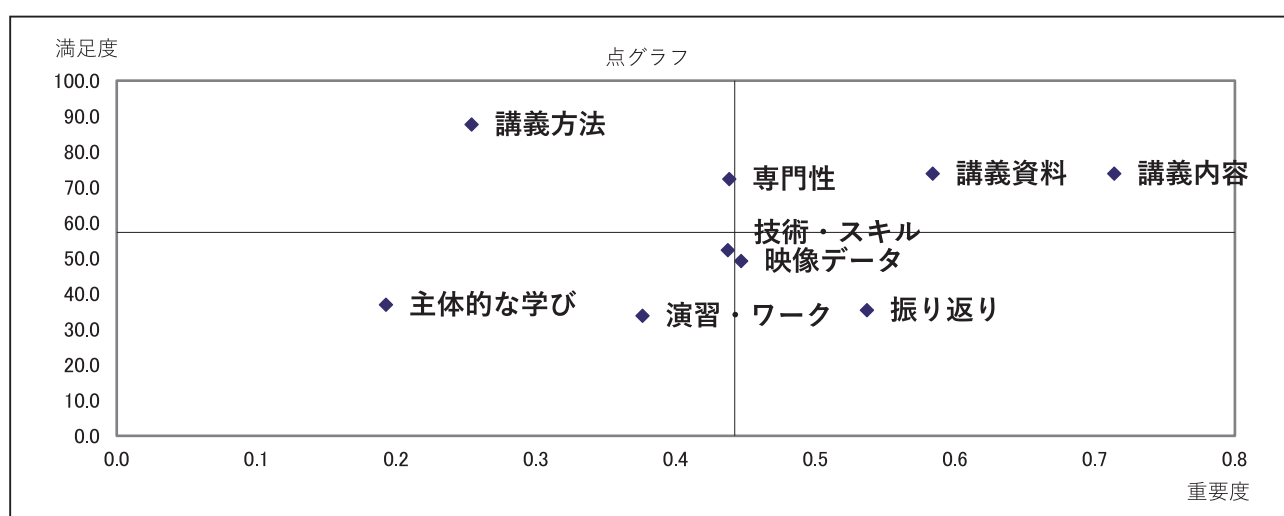


図 5 CS (Customer Satisfaction, 講義満足度) グラフ

を“満足度”としている。なお、グラフ上の横線と縦線は、「満足」の割合（満足度）と単相関係数（重要度）の平均となっている。改善度については、その値が大きいほど、その項目に関する手立てが不十分であり改善を図らなくてはならない項目を示している。値が負（マイナス）の場合は、改善しなくても現在のままで満足な講義・教授であることをあらわしている。CS を援用した分析結果から「講義方法」「専門性」「講義資料」「講義内容」に関してはほぼ満足しているが、「主体的な学び」「演習・ワーク」「振り返り」には課題が見られた。

4. 考察

教育相談の講義では、新たな教育的課題を取り入れながら、これまでの教育相談の知見を踏襲し

たかたちで情報や教授方法などのアップデートを積み重ねていかななくてはならない。また、新たな教育施策や法制度の改正も踏まえた上で講義を実践していく必要がある。本学における教育相談の講義でも、常に講義内容を検証しながら現在の教育的課題に沿ったプログラムを提供し、また、学生の教育的ニーズや問題意識などを明確化した上で、講義内容や方法を改善、改訂も実施してきた。

一方、本調査における KJ 法や KH Coder を援用した学生のレポート記述分析では「不登校」「いじめ」「児童虐待」「発達障がい」「保護者支援」などのテーマや「連携支援」「チームアプローチ」など専門性・相談スキルの獲得などに関心を示していることが明らかとなった。また計量テキスト分析 (KH Coder) でも「児童虐待」「不登校」「保

護者」「外国籍の子ども」「発達障がい」といったテーマや「計画」「理解」「連携支援」「カウンセリングマインド」「ニーズ」「アセスメント」「多様性」などのキーワードが浮上しており、学生の学びのニーズを把握するための基本的なデータが抽出できたと考える。これまでに大学全体で実施をしている授業評価アンケートによって学生の学びを確認することはできていたが、さらに具体的に学生の学びの意識を把握していくためには「教育相談」以外の他の講義についても引き続き検討をしていかななくてはならないと考えている。

総体的に、学生の教育的ニーズの中に教育相談を主体的に学ぶことや講義や演習などを通じて、より確かな教育相談力を高めていくことの必要性につながっていることが確認できた。ただ、限られた時間内で、いかに効果的に指導・支援していくことが必要なのかについては、我々高等教育機関の教育に携わっている教員の課題として認識しなくてはならない。教育相談に関する基本的理解から活用、そして教育現場での実践や応用につながっていくことができるような手立てを講じなくてはならないだろう。

また、CS を援用した講義満足度からは、今後の改善点として「主体的な学び」「演習・ワーク」「振り返り」の3つの要改善項目が抽出され、これまでの先行研究では提示されていなかった講義方法の改善点について具体的に問題提起することができたと考える。

「主体的な学び」については、学生自身が教育相談を学ぶ意義を実感できるように、実際に生じたケースをもとにして、教授内容の選定と問題提起のあり方を改善していくことや教育現場の課題と密接に結びついていく必要性があろう。また「演習・ワーク」については、相談支援におけるサポートの結果をどのように具体的な支援に結び付けていけばよいか課題意識をもっていることが想定され、Think-Pair-Share のスタイルで、支援方法や課題意識の共有化・発展化を図っていくために、より具体的・系統的なワークにしていくことが求められる。さらに「振り返り」についても講義内容の整理や支援の方向性を検討していくために課題意識を明確化させていくことができるような時

間の確保が求められる。教育相談は、学校現場だけでは完結できない問題も数多く存在しており、各関係機関との積極的なつながりや活用力も含めた講義内容を取り入れていくことの必要性も示唆された。今後も、講義や演習などを通じて、学生自身の将来の教育相談活動や実践に活用できる学びの場を提供していかななくてはならないと考えている。

5. まとめと今後の展望

本研究では、教職課程履修学生の授業評価内容の分析と講義満足度を検討してきた。その結果、学生たちの学びのニーズとして、「不登校」「いじめ」「児童虐待」「LGBTQ⁺」「保護者支援」など、相談支援の核となっているテーマをより深く学びたいという意識が再確認できた。また「専門性」「相談スキル」「カウンセリングマインド」「信頼関係」「予防的支援」「連携支援」「チームアプローチ」などの支援アプローチの修得といった学びのニーズも明確となった。また、講義における満足度調査からも満足度が高い項目として、「講義方法」「講義内容」「講義資料」「専門性」などが抽出され、教授課題としては「主体的な学び」「演習・ワーク」「振り返り」の3項目が確認された。

本研究の限界と今後の展望としては、サンプル数が少ないことや異なる学部間（文化学部・看護学部・健康栄養学部）のデータをひとまとまりとして検討をしたため、結果に偏りが生じている可能性は否めない。今後サンプル数を蓄積していくとともに、学部間での相違点も明らかにしていく必要があると考える。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2015) 『児童生徒の教育相談の充実について (通知)』
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/066/gaiyou/attach/1388337.htm) (最終アクセス日: 2025年9月5日)
- 2) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2020) 『児童生徒の心のケアや環境の改善に向けたスクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーによる支援の促進等について』

- (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/20210119-mxt_kouhou02-1.pdf) (最終アクセス日: 2025 年 8 月 26 日)
- 3) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2024) 『スクールソーシャルワーカーの効果的・効率的な活用促進について』
(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/20241209-app_dev04_1.pdf) (最終アクセス日: 2025 年 8 月 26 日)
- 4) 向後礼子・山本智子 (2019) 『ロールプレイで学ぶ教育相談ワークブック (第 2 版)』ミネルヴァ書房.
- 5) 葉山貴美子・松久眞実・永井明子・八木成和・玖村佐枝子 (2025) 「教育相談実践基礎プログラムに関する科目間連携 (1) - 教職課程科目を中心に -」桃山学院大学教育実践研究紀要 7, 132-146.
- 6) 丹羽純子・吉澤寛之 (2024) 「教育相談体制の改善と教師支援力の強化による教育相談活動の機能向上」岐阜大学教職大学院紀要」7, 21-30.
- 7) 石山貴章 (2024) 「教員を目指している大学生のいじめに関する意識 - Text Mining による質問紙調査, Minute Paper の記述分析の探索的検討 -」Humanismus35, 11-25.
- 8) 柘千晶 (2021) 「中学校の教育相談において教師に求められるコンピテンシーの検討 - 大学生を対象とした回想法による調査を通して -」信州大学教職支援センター教職研究 12, 46-59.
- 9) 亀田研 (2024) 「教員養成課程におけるセルフコンパッションを高めるプログラムの効果および教育相談に与える影響」朝日大学教職課程センター研究年報 26, 23-31.
- 10) 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中公新書.
- 11) 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析 - 内容分析の継承と発展を目指して - 第 2 版』ナカニシヤ出版.
- 12) 樋口耕一・中村康則・周景龍 (2022) 『動かして学ぶはじめてのテキストマイニングフリーソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析』ナカニシヤ出版.
- 13) 末吉美喜 (2019) 『テキストマイニング入門 Excel と KH Coder でわかるデータ分析』オーム社.
- 14) 管民郎 (2007) 『Excel で学ぶ多変量解析入門 (第 2 版)』オーム社.